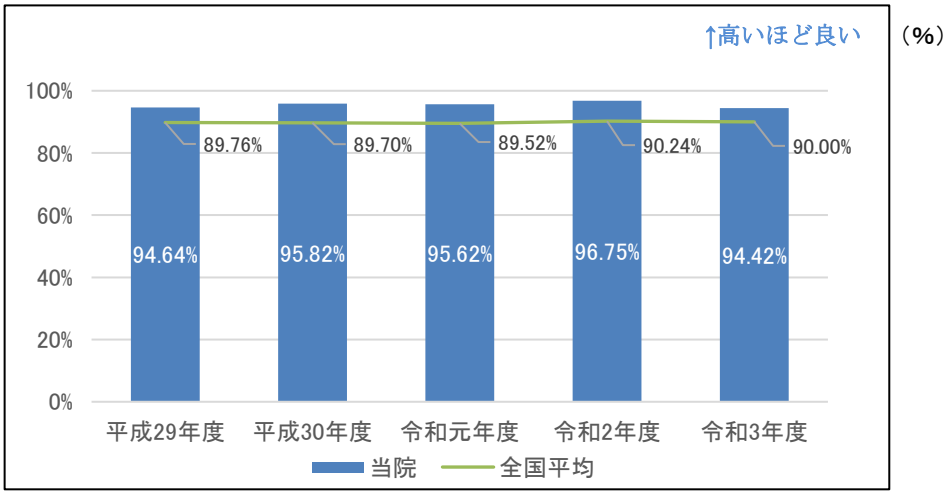
23-1　手術あり肺血栓塞栓症予防対策実施率

○項目の解説

肺血栓塞栓症は、エコノミークラス症候群ともいわれ、血のかたまり（血栓）が肺動脈に詰まり、呼吸困難や胸痛を引き起こし、死に至ることもある疾患です。長期臥床や下肢または骨盤部の手術後等に発症することが多く、発生リスクに応じて、早期離床や弾性ストッキングの着用などの適切な予防が重要になります。当該指標は、術後肺血栓塞栓症予防の対策の実施状況を評価するものです。

○当院の実績



○当院の自己点検評価

当院は、手術室内での手術件数において、100床あたりの手術件数が全国の国立大学病院全体においてもトップクラスに位置しております。手術を行う患者さんに対しては、安全に手術を行うため適切に肺血栓塞栓症の発症リスクを評価し、発症リスクが高いと判断した患者さんには、圧迫力が高い弾性ストッキングや間歇的空気圧装置を装着するなど、血行を向上させ肺血栓塞栓症の発症予防に努めています。

当院における手術時の肺血栓塞栓症予防対策実施率は、国立大学病院の全国平均より高く上位に位置しており、患者さんが安全に手術を受けられるよう努めています。

○定義

DPC データを元に算出した、肺塞栓症リスクの高い患者に対する、予防対策の実施割合です。

○算式

分子：危険因子手術を行い、かつ、抗凝固療法薬を使用したまたは管理料を算定した患者数

分母：危険因子手術を行った患者数